

<書評論文>

コミュニティをめぐる概念と実践の可能性

—— 日常生活へのまなざし ——

Graham Day,
Community and Everyday Life
(Routledge, 2006)

香川直子

はじめに

「なぜ人々は互いによりうまく付き合えないのか。なぜ人々は自らの隣人に対してより強い責任感を抱くことができないのか」(本書序文 ix-x)

現代におけるさまざまな問題の多くは、もしかすればこの問いに帰結するのかもしれない。この問いに対峙するとき、人間関係の紐帯としてコミュニティはどのような可能性を提示してくれるのだろうか。

本書は現代社会において多様化の渦中にある「コミュニティ」概念を学問的に整理するとともに、日常的にこの概念にどのような役割が付与されており、また「コミュニティ」の名のもとにどのような活動が行われているのか、著者Graham Day⁽¹⁾独自の視点を交えながら考察を行うものである。

今日、なぜコミュニティが注目されるのか。それは、社会的孤立や犯罪など人々を脅かす社会問題の責任が、コミュニティ領域に負わされているからだと著者は指摘する。たとえば、周囲との接触を絶った「独居老人」に地域住民がもっと関わりをもつべきだという指摘は珍しいものではない。

⁽¹⁾ ウェールズ大学。関心領域は、コミュニティとローカリティ研究、地域社会学・都市社会学、ナショナルアイデンティティなど多岐に及んでいる。

昨今の学問領域や政治的・政策的な領域におけるコミュニティ概念の普及を背景に、本書が目的とするのは、「この『油断のならない (tricky)』概念の意味を探求し、それを社会学者たちがどれほど効果的に、経験的研究の手段として適用できるか」を検証することである (p.6)。

本書の構成は以下のとおりである。まず、第1章と第2章において、これまでの研究蓄積を振り返りながらコミュニティの概念整理を行う。次に、第3章と第4章で、実証的研究の見解によりながら、コミュニティと「日常生活」との関連について述べる。第5章と第6章においてはさまざまな社会学者の議論を引きながら、現代における多様なコミュニティ概念とそのありようを分析し、第7章では、グローバル化とローカル化が同時に進行する現代社会において、コミュニティの今日的意義と将来的な展望について論じている。最後の第8章では、著者によるこれまでの議論に基づき、コミュニティ研究に対する新しい方向性が示唆されている。

以上を踏まえ、本稿はまず、第1節でコミュニティ概念と研究をとりまく現状を大まかに振り返る。続く第2節で、第1節で紹介した論点を中心に批判的考察を行っていく。

1 内容紹介

1-1 コミュニティに関する研究蓄積

本書の意義は、社会学や地理学など他方面におよぶ複雑で曖昧なコミュニティ概念をたねんに整理したことにある。Émile Durkheim、Max Weber、Karl Marx、Tönniesら4名の古典的社会学者の学説史に始まり、Zygmunt BaumanやAnthony Giddensなど現代において活躍する多くの社会学者の学説まで、網羅的に紹介されている。同時に、コミュニティ概念の歴史的変容と現代のコミュニティ概念における多義性が明らかになった。

まず、Émile DurkheimやKarl Marxらの伝統的コミュニティ概念は、「安定 (stability)」と「同質 (homogeneity)」をその特徴としていた。しかし、工業化を契機として、1950年代以降、現代社会のあり方が急速に変化する中で、「近代化」「合理化」、そして「都市化」の代償としてコミュニティの喪失が叫ばれてきた。コミュニティの中心的意味は、かつてのように日々の人間関係に安全で安定した状況を生み出してくれるものではなくなった。いまやコミュニティとは、断片的かつ流動的で混沌とした現実に直面するなかで、さまざまな境遇に置かれた人々がこぞって手に入れようと努力する対象なのである。

こうした変遷のなかで、社会学や地理学、人類学などにおいて、コミュニティ概念は明

確な定義づけが共有されないまま多様に用いられてきたと著者は指摘する。今日では、政策立論者や政治家、市民のあいだで広く使われているにも関わらず、そのイメージは掴みにくく、文脈に応じて意味も変化するのだ。

著者は、コミュニティの本質的意味は「人々が共通に持ち、人々をともに結びつけ、また、互いに帰属意識を与えるもの」だという (p.1)。多くの研究者たちによって、この点は共通認識されているにも関わらず、なぜコミュニティ概念は複雑で曖昧なものになってしまうのか。著者によれば、まず、何をもって「コミュニティ」と捉えるかという時点で多様な解釈が存在するからだ。また、個人主義と集団主義、現実描写と道徳概念など、研究上の切り口もさまざまである。さらに、コミュニティを「当然の」現実とする人もいれば、達成されるべき使命と捉える人もおり、論じる次元も一様ではない⁽²⁾。つまり、コミュニティ概念をめぐるさまざまな位相の議論が複雑に絡み合っているといえよう。

1-2 コミュニティの変容と多様化

安定的で同質的な従来のコミュニティが変容するなか、現代においてコミュニティはどのような様相を呈しているのだろうか。ここでは、2つのコミュニティ観を紹介する。

1-2-1 分断されたコミュニティ (Divided community)

著者はまず、「闘争の場 (arena of conflict)」としてコミュニティを定義する (p.116)。従来のコミュニティ概念に付与されていた、伝統や連帯意識、固定的な境界といったイメージの曖昧さに疑問を投げかけ、変化や闘争の場としてコミュニティを提示し直している。それは、非空間性と文脈依存性をもつものだ。伝統的なコミュニティが特徴としていた全体的合意や不可逆性は成立せず、「発展 (development)」や「再生 (regeneration)」がキーワードとなる (p.117)。

また、闘争の場としてのコミュニティでは階級や身分が強く意識され、経済状況だけでなく、人々の居住空間や生産形態に大きな影響を与えている。そうしたコミュニティにお

⁽²⁾ 前者の立場では、コミュニティは生きられた相互依存関係を「取り巻く社会的現実 (encompassing social fact)」として描かれ、集団への愛着や連帯感を呼び起こすことによって個人的な選択や意思を否定するものだ。一方、後者の場合、コミュニティは「よりよい生活を求める人々にとっての比喩 (a metaphor for people's longing for a better life)」や「政治的変動における想像上の枠組み (an imaginary framework for political mobilization)」あるいは、経験的な生活と想像上の生活というギャップの偏差として現実に追いつめられるものである。

ける行為や選択は、主体的な個人の意思と見なされがちだ。一方で、ローカルな範囲を超えた、より大きな構造的圧力の存在も明らかになりつつある。

具体例として、コミュニティに対するグローバル化の影響を著者は強調する。1990年代以降、国境を越えた人やモノの移動が可能になったことにより、世界はあらゆる部分でつながりを見せ始めた。しかし、一つの小さなコミュニティは、それを内包するより大きな枠組み、地方行政や国家、国際社会といったものが作りあげる重層的な権力構造に組み込まれていく。多層な権力のまなざしのもとにコミュニティは差別化され、無意識のうちに人々は統治すべき対象として扱われている。さらに著者は、コミュニティ内部の連続的な闘争と分裂の可能性を指摘する。つまりコミュニティとは独立した行為体ではなく、権力のもとに管理され、また、新たに権力を生み出す集合体なのだ。

1-2-2 社会的構築物としてのコミュニティ (The social construction of community)

また著者は、まったく異質の個人や集団の集まりにすぎないものに対し、「コミュニティ」と名づけることによって、にせの思いやりや一体感を与えることができると指摘する。コミュニティを取り巻く概念はいかにしてつくられるのだろうか。「現実そのもの」より「現実がどう理解されているか」を重視する社会構築主義者たちは、都市や地方において、社会的実践 (social practices) として行われる人々の行為や、それらに対する見解には、さまざまな言説が大きな影響を与えていると主張する。

たとえば、「村」という言葉にはどのようなイメージが想起されるだろうか。1960年代以降、地域の再編と逆都市化の動きに助長され、村には「本当の」コミュニティが存在するという憧れが蓄積されていった。今日においても、「村」とくに農村には、人々の温かなつながりが保たれていると信じている人は少なくないだろう。

著者によれば、Marilyn Strathernはそうした「村」を「心的な構築物 (mental construct)」と位置づけたという (pp.165-7)。彼女は、村におけるコミュニティの同質性と温かなつながりを主張し、同時に、コミュニティのもつ流動性と柔軟性を指摘した。その後、地理学者たちによっても、実際の村では排除と包摂を要素としてコミュニティが成立することが明らかにされた。外から見れば一様に見える村の暮らしも、そこに住む者にとっては全く異質な個々の集まりである可能性が高い。同時に、よそ者は村の掟に柔順であることが求められ、それに触れた者は排除されていく。こうして、コミュニティ概念をめぐる、「都市」対「田舎」、ひいては「外」対「内」という対立図式が広く認識されるようになった。

このようなコミュニティは、人々の幻想や行為によって生み出されるものであり、実在するか否かは問題ではない。ここで、著者はこうした構築主義の限界を指摘する。つまり、コミュニティを象徴的で想像上のものと捉えることによって、実際のコミュニティを規定する多様な外的・内的要因を見過ごしてしまうのだ。構築物としてのコミュニティとは、「成員の心の中」にあるにすぎず、現実にはコミュニティと呼べる集団など存在していない可能性もある (p.179)。

では、なぜ、実体を伴わないコミュニティに対するイメージや象徴が広く共有されているのだろうか。想像上の構築物を受け入れ、活用していこうとする社会的な要求が存在するからだと著者は指摘する。つまり、想像上のコミュニティ概念は社会集団との帰属感や自らのアイデンティティを求める人々によって支持されているのである。

1-3 批判を乗り越えて——コミュニティのゆくえ

これまでの議論を通して見えてきたのは、コミュニティはその内部に闘争と分裂をはらんだ不確かなものであり、権力を行使される対象としてまなざされるということである。さらに、概念上のコミュニティによって、成員を取り巻く複雑な権力関係が覆い隠されてしまうことが明らかになった。

コミュニティをめぐるこうした否定的な側面に対して、自由主義的立場から多くの批判がなされてきた。これに関して、本書ではAmitai Etzioniらのリバタリアニズムが紹介されている。20世紀後半の欧米社会において、自己中心的個人主義に陥ることを危惧した彼らは、規律と道徳的信念を取り戻し、さまざまな社会問題を解決する手段としてコミュニティの有効性を謳う。だが、こうした主張は、伝統的なコミュニティの復活を願い、社会的コントロールや帰属集団への責任を極端に称賛するものと非難されるのだ。

しかし、著者はコミュニティ形成の一手段として「理性的な協力と寛容 (reasonable cooperation and tolerance)」に可能性を見出す (pp.203-9)。著者はコミュニティ成員に対し、コミュニティと自らを取り巻く状況に自覚的であることを望んでいるのだ。つまり、成員たちが主体的な選択の結果としてコミュニティを形成するのであれば、伝統的コミュニティのような行き過ぎた集団主義に陥ることはないという。

多くの異なる社会集団で構成された今日の多様な社会において、社会的アイデンティティの拠りどころや帰属感を求める声は一段と高まっているといえよう。そうした社会的関心を背景に、「新たなコミュニティ」が求められている。それは「運命 (fate)」によって定められたものではなく、嗜好や関心といった、まさに個人の主体的選択によるものであ

る (p.215)。具体例として著者は、ネットワークやバーチャル・コミュニティ、ライフ・スタイルなどを挙げる。ただし、著者はそれらをコミュニティという見せかけに過ぎないと指摘する。こうした新たなコミュニティは、異質な個々の集まりであり、確固たる結びつきが保障できず、それゆえ非常にあやふやな紐帯であるという。つまり、新しいコミュニティの場合、いくら個人が主体性をもって自覚的につながろうとしても、互いの結びつきが必ずしも必要ではないため、コミュニティと呼ぶにはあまりにおぼろげで頼りないのである。

以上より、著者の求めるコミュニティとは、主体的な成員の参加を前提とするだけでなく、何らかの社会的リアリティを保持しているものでなければならない。なぜなら、コミュニティは、社会的リアリティをめぐる「活動と実践 (activities and practices)」が複雑に入り混じったもののなかでこそ描かれるものだからだ⁽³⁾。

だからこそ、著者は「日常 (everyday)」や「日常生活における実践 (the practices of everyday life)」を重視するのだろう。著者の挙げる労働者階級コミュニティ (working class community) は、労働者たちの積極的な結びつきによって作りあげられたものであり、生活様式において多くの共通点をもっている。職業の多様化と共に、それぞれの労働者たちは多種多様な集団をつくりあげるのだ。労働形態だけでなく、時間的・経済的条件の似通りに、生活様式そのものに共通性が生み出される⁽⁴⁾。そうした共通点を核に人々はつながりあい、さまざまな社会問題に対し行動を起こすことが可能となるのだ。

結論である。コミュニティの概念とあり方をめぐって、これまでさまざまに論じてきた著者は、本書の最後でわれわれに対し、次のようなメッセージを送る。「社会の成員たちが極めて徹底的に (intensively)、かつ強い決意のもと (determinedly) コミュニティ概念に取り組んでいる場合は、……そうした混乱と不明瞭さはそれほど重要ではないように思われる。より正しい意味を法的に制定しようとするのも適切ではない……むしろ、さまざまな目的を果たすためにコミュニティがどのように用いられてきたかということが重要なのである (p.245)。

⁽³⁾ たとえば、「介入の道具としてのコミュニティ (community as a tool for intervention)」は社会運動のなかで利用されてきた。1990年代、コミュニティは当時の社会変化の資源であり、責任ある主体と見なされていた。たとえば、AIDSの拡がりを受けて、セーフティーセックス提唱運動が成功したのは、集合的自助 (collective self-help) という哲学によって鼓舞された活動家やボランティア組織によるコミュニティの支持を得られたからだという (p.234)。一方で、不運なことに、政治的・社会的状況によってコミュニティが概念的に悪用されてきたのも事実である (pp.240-5)。植民地におけるコミュニティ政策は、植民地下の人々を新しい経済的・文化的変化、より近代的な慣習に適応させるという目的のもと、洗練されてきたのだ。

⁽⁴⁾ ここで、これらの例として著者が挙げるのが、大工や水道屋、ローリー運転手、漁師や炭鉱夫などなんらかの技術職に限られている点には注目する必要があると思われる。

著者によれば、コミュニティ研究における社会学者の果たすべき役割とは、コミュニティの明確な定義を人々に教示することではない。日々の生活を営む上で、無意識のうちにコミュニティの持つ響きのよさとイメージに踊らされ、振り回されていないかどうか、社会全体に問い続けていくことだと言えるだろう。そして、人々の日常的な営為の結果、コミュニティとしてさまざまに立ち現れるリアリティへ目を向けよと、注意を喚起するのだ。

2 考察

以下ではこれまでの著者の主張を受けて、評者が本稿の冒頭部で引用した問いに立ち戻り、現代社会におけるコミュニティ成立の可能性をささやかながら模索していく。

2-1 理性的で主体的な人間像の落とし穴

本書は、コミュニティ「概念」に縛られず、その複雑な実状に注目することの大切さを説いてきた。それは、コミュニティ概念とそのありようをめぐる否定的な側面を描き出すことでもあった。「コミュニティ」と名付けることで、雑多でとらえどころのない現実に特定の意味が付与され、現代社会のなかで広く受け入れられていく。確かに、ある集団を「コミュニティ」と認識することで、統制や分析の対象として明確化することはできる。だが、日常生活において存在しているのは、その時々状況に応じて柔軟に変化する人々の営みでしかない。明確な意味や目的を伴うコミュニティがあるのではなく、「コミュニティ」と名づけられた社会的リアリティが存在しているのだ。われわれが目すべきは、そうしたコミュニティがどのように機能するかということである。闘争的で、ともすれば概念が一人歩きしがちなこのコミュニティを通して、異質な個人はどのようにつながりを形成していけるのだろうか。

著者によれば、主体的な個人の「理性的な協力と寛容」によってコミュニティは形成されるという。確かに、従来のコミュニティの特徴とされていた均質的で強制的な側面を乗り越えた、新たなつながりの形である。自立的な個人が自らの意思で集団に参加し、成員としての責任や役割を担うことが求められよう。

しかしながら、ある集合体に対するコミットメントの強さや関わり方の是非は、一体誰がどのように判断できるのだろうか。「理性的な (reasonable)」という言葉の背後には、理性的かどうかを判断する者の権力性があるように思われるのだ。さらに、こうした主張

は、コミュニティに参加する人々の姿として、理性的で主体的な人間像を想定しているのではないか。もしそうならば、「理性的な協力と寛容」が可能な市民という「強者」だけが、コミュニティメンバーたりうるのかという疑問が湧く。

だが、誰もが主体的かつ自覚的にコミュニティに参加しているわけではない。たとえば、労働者階級コミュニティにも強制や惰性の結果、参加している人もいるだろう。積極的な参加を前提とすることで、コミュニティのもつ排他的な側面をいっそう強める危険性がある。参加への意欲や目的が大きく異なるからこそ、異質な個々がつながりあっていくことはきわめて難しい。だからこそコミュニティ研究が必要とされるのではないだろうか。

2-2 「日常生活」という視点——生産活動に焦点化することの限界

ここで、著者のコミュニティ観をふりかえろう。社会的リアリティに注目する著者にとってコミュニティとは、メンバーの結びつきを強化するような持続的なルーティーン（「日常生活」の共有）と帰属意識を伴う結びつきのあり方であった。それは日々の暮らしのような極めて身近な現実において形成されるものであり、また逆に、そうした結びつきを通してこそ、人々の些細な日常のあり方が見えてくると主張する。ここに、コミュニティと「日常生活」の並列関係が成り立つのだ。

では、著者の意味する「日常生活」とはどのようなものだろうか。確かに、1-3で見た労働者階級コミュニティは集住性が高く、居住空間と生活様式が共有されていた。この場合、「日常生活」は生産活動を意味しており、そこで生み出されるつながりは強固なものであろう。

一方著者は、個人的な趣味や関心に基づくライフ・スタイル (lifestyles) を消費活動として否定する。ライフ・スタイルからコミュニティを形成する人々は、消費文化に夢中になっているだけであり、自分の興味・関心がなくなれば、集まり自体も変化し、簡単に消滅してしまうという。確かに持続性を求める著者のコミュニティ観からすれば、こうしたライフ・スタイルをコミュニティと呼ぶことはできないだろう。

しかしながら、個人の価値観や利害関心の多様化が進む現代社会において、どのようにして日常的に集合意志を生み出していくことができるのだろうか。著者も指摘するとおり、炭鉱夫のような労働者階級コミュニティとは異なり、人々の職業と生活の乖離が進むなか、異質な個人たちが一時的ではない互いの共通点を見つけ出すことは非常に難しい。いうならば、著者が否定するライフ・スタイルとしてのコミュニティのような流動的な集まりこそが現代社会の多様な実情にそくしているのではないか。そもそも、生産活動や消費活動

といった側面で「日常生活」を括りだすことの限界を感じざるをえない。生活の現状に注目するとき、人々の営みはよりいっそう不明瞭でとらえどころのないものとして押し寄せるからである。

2-3 ゆるやかなつながり——日常的互助関係

日常生活に注目することの意義とは何か。おそらく、それは主体的で自立的なコミュニティ成員ばかりを想定することではないだろう。著者の主張する「日常生活」は生産活動に限定されたものであり、インフォーマルな領域である日々の暮らしの多様な側面を見逃している。また、本書は欧米におけるコミュニティのあり方を論じてきた。では、本書の主張は、日本の文脈においてコミュニティを論じるさいにどのような意味をもつのだろうか。

現代日本社会における互助行為の可能性を分析した恩田は、沖縄社会における伝統的な互助慣行を「生活の知恵」と表現した（恩田2006: 321-2）。政治的に複雑な歴史を持つ沖縄社会では統治者による十分な援助が得られないなか、生活を営んでいくために地域住民たちの「ヨコのつながり」ができたという。こうした「ヨコのつながり」は、まさに日常生活に根ざしたコミュニティと呼べるものである。

評者もこの恩田と問題意識を共有し、若者の人口流出（特に女性）と高齢化の進む沖縄県本島北部の農村においてフィールドワークを実施している。そこにおける事例は、日常生活におけるゆるやかな関係のあり方を示してくれている。

国頭郡東村の平良区では、男性たちのある集まりがある。40、50代の男性が6、7名集まって毎晩酒を飲んでいる。メンバーは、ある農家男性（Aさん、40代）を中心として、彼の友人や親族、農業関係者などある程度固定しているものの、たまたま村を訪れた人が何らかのきっかけで参加するなど非常に流動的である。夕方になればふらりと集まり、酒を飲み、つまみを食べ、時間がくれば好き勝手に帰る。農家や公務員など職業も一様ではなく、共通の話題があるわけではない。Aさんは、集まり始めたきっかけや理由はわからず、「ただ飲んでいるだけ」と話す。正式な村の寄り合いとは異なり、特別な協力や従属が求められることのないこのゆるやかな集まりに、彼らが必ずしも「社会的アイデンティティ」や「帰属意識」を感じているとは思えない。

だが、彼らの営みに意味を見出そうとするなら、互いに仕事や家族の悩みを打ち明けたり新たな仕事を見つけたりする場になっていることがわかる。また、独身男性の多い村内で、毎夜通う場が存在することは、精神的互助機能を果たしているともいえるだろう。生

活を営むなかで無自覚につくりあげられた、まさに恩田のいう「生活の知恵」のような側面をもっている。彼らは外部からの名づけや意味づけにとらわれない、柔軟でゆるやかな集団をつくりあげているのだ。

著者が、生産的な日常生活における主体的・理性的な個人どうしのコミュニティを想定していたのに対し、彼らのつくりあげる集団は必ずしも生産的ではない習慣的なライフワークに基づく、「心的な構築物」である。だが、こうしたインフォーマルな集団こそが、雑多な日常生活における人々の互助的営みの可能性を教えてくれる。

こうした集まりを「コミュニティ」として取り上げるには議論が必要だろう。しかし、複雑でとらえどころのないこの日常のなかで、男性たちが自らつくりだした互助関係が存在している。ここに、現代社会における新たなつながりの萌芽が見てとれるのではないだろうか。

おわりに

本書は、欧米におけるコミュニティのあり方と変容を論じてきた。コミュニティ概念の多様性には、多くの研究者が悩まされている。それゆえ概念整理を試みようとして、コミュニティを論じた多くの出版物が後を絶たない。意図せずして、そうした努力がまた、コミュニティの氾濫を引き起こしているように思われる。しかし、現実には、とらえどころのない人々の営みが存在するにすぎない。そして、「コミュニティ」と呼ばれるリアリティは、曖昧なものを曖昧なものとしてそのままに受け止める、柔軟性を持ち合わせているのだ。

参考文献

- 恩田守雄, 2006, 『互助社会論——ユイ、モヤイ、テツダイの民俗社会学』世界思想社。
 デランティ, G., 2006, 『コミュニティ——グローバル化と社会理論の変容』(山之内靖・伊藤茂訳) NTT出版株式会社。
 Strathern, M., 1982, "The Village as an idea : Constructs of Village-ness in Elmton, Essex", A. P. Cohen (ed) *Belonging : Identity and Social Organisation in British Rural Culture*, Manchester : Manchester University Press.

(かがわ なおこ・修士課程)